

「邪馬台国 所在地の解明」

— 江戸時代以来、300年間の論争の終焉 —

その2：投馬国の記述追加の理由

2025年12月 丸地三郎

「邪馬台国所在地の解明」について、以下の3部構成で論じる。

- ・ 魏志倭人伝の史料批判
- ・ 投馬国の記述追加の理由
- ・ 邪馬台国の所在地

本稿は、その2「投馬国の記述追加の理由」として、著者の陳寿の目的と理由を探る。

1. その2：はじめに

魏志倭人伝に「史料批判」を行った処、邪馬台国への旅程の原史料は、魏の初回の訪問使節の梯儁一行が記した旅程であることが判った。そこに、複数の文章が追加されていたことが判明した。追加された文章を除くと、原資料の旅程は、整った記述で、矛盾が無く明瞭なものであった。

追加されたのは、以下の三つ文章。

- (1) 帯方郡の使者の往来では常に駐在する所。
- (2) 其の南には狗奴国がある。男子を王と為し、其の官に狗古智卑狗が有る。女王に属さず。
- (3) 南へ水行二十日で、投馬国に至る 長官は彌彌、副官は彌彌那利である。五万戸余。

魏の二回目の訪問使節は張政一行である。(1)の使者が常に駐在する件と(2)狗奴国の件は、共に、二回目の張政一行が邪馬台国へ行って判ったことで、この文章を加えることにより、最新の状態を記述するとの目的が明白に判る。但し、乱暴に追加したために、文脈に矛盾が発生していた。問題の(3)の投馬国の記述に関しては、単純には目的と理由が判明しないので、ここで取り上げる。

しかし、陳寿が「投馬国の記述」を挿入したことには、重要な理由があったと推測する。理由を探るにあたって考えるべきことは中国側の事情である。分かれて三つ巴で戦っている三国・魏蜀呉の政治情勢と外交戦略、及び、魏が使節団を倭国へ派遣した事情を調べた上で、南方の遠い箇所が存在する投馬国が、何故、追加されたのかを探る。

陳寿の三国志については、事実を忠実に簡潔で客観的に記述したと評価があるが、凡そ二百年後に宋の文帝が、「簡潔に過ぎる」として、裴松之に命じて注をつけさせた。その結果、文帝は、この優れた「注」により不朽となるだろうと裴松之を賞賛したと云う。陳寿の「簡潔すぎる文献」と云う特徴は、文脈に矛盾が生じて、乱暴に文章を挿入して済ませてしまうという姿勢を許容したのかも知れない。

2. 魏の倭国訪問使節団派遣の経緯

この初回の梯儔一行の使節団派遣については、魏志倭人伝の中に明瞭に経緯が記述されている。「景初2年6月」から始まる部分にある。倭の女王が難升米を派遣し、魏の皇帝(明帝)は12月に難升米を接見した。その時の詔書が倭人伝中に引用されている。その中で、「卑弥呼が遠方より使を遣はし、貢ぎ献ずるのは、忠孝なり」として、「親魏倭王との称号を与え、金印紫綬を授ける」ことにしたと記している。次に、「この金印紫綬は包装して帯方太守に託して、汝に授けることとした」と記している。これが、魏の使節派遣の根源となっている。その外の豪華な贈り物については、そのまま難升米等に渡された。帰国したら魏の贈り物を国中の人に示すようにとの魏側の要請も記された。

著者は初めて魏志倭人伝を読み解いていった時に、難升米との接見の儀礼の場で、魏の使節を倭国へ派遣すると宣言した魏の皇帝のやり方に、非常に驚いたことを記憶している。倭の使節が贈り物を受領した時点で、魏の使節訪問を自動的に認めたことになる、この方法は、見事な外交手法であると判り、驚いた。

倭の女王の朝献に対する豪華な贈り物は、倭国が魏に味方していることを広く喧伝する材料として使われたものと推測する。

3. 倭国に関する外交情報

魏志倭人伝は、魏志の中に記されている。しかし、陳寿の記した三国志は、魏志/呉志/蜀志で構成され、この呉志にも倭人のことが記載されている。

前年に皇帝に即位した孫権は、二將軍に武装兵一万を率いて海を渡らせたとある。

✓ 三国志 呉志 「呉主伝第二」

- 黄龍二年春正月 遣將軍衛溫、諸葛直將甲士萬人浮海求夷洲及亶洲。亶洲在海中，長老傳言秦始皇遣方士徐福將童男童女數千人入海，求蓬萊神山及仙藥，止此洲不還。世相承有數萬家，其上人民時有至會稽貨布，會稽東縣人海行，亦有遭風流移至亶洲者。所在絕遠，卒不可得至，但得夷洲數千人還。

三年春二月，衛溫、諸葛直皆以違詔無功，下獄誅。

『黄龍二年(西暦230年)に、將軍の衛溫と諸葛直とを派遣し、武装兵一万を率いて海を渡り、夷洲と亶洲とを捜させた。亶洲は大海の中にあり、老人たちが言い伝えるところでは、秦の始皇帝が方士の徐福を遣わし、童子と童女と数千人を引きつれて海を渡り、蓬萊の神山とそこにある仙薬を探させたとき、徐福たちはその島に留まって帰ってこなかった。その子孫が代々伝わって数万戸にもなり、その洲に住む者がときどき会稽にやって来て布を商った。会稽郡東部の諸県に住む者が、大風に遭って漂流し、亶洲に着く場合もあるという。しかしこの洲は遥かな遠方にあつて、將軍の衛溫たちは、結局、それを捜しあてることができず、ただ夷洲から数千人の住民をつれ帰っただけであつた。

黄龍三年の春二月、衛溫と諸葛直とは、詔にそむいて成果を挙げなかったとして、二人とも獄に下され、誅殺された。』

(ちくま学芸文庫 正史 三国志 呉書Ⅰ 陳寿 裴松之 小南一郎訳 127頁より一部著者修正)

会稽を訪れる倭人のことが記載されるのは、三国志が初めてではない。漢書・後漢書にも記載されている。中国の文献の中では、倭人と見られる記述が、二系統が存在することを喚起する。

✓ 漢書

- 地理志燕地条に ①「樂浪海中有倭人、分為百余國。以歲時來獻見云。」：
『樂浪海中有倭人有、分れて百余國を為し、歲時をもつて來たりて獻見すと云ふ。』
- 地理志吳地条に ②「會稽海外有東鯤人、分為二十餘國、以歲時來獻見云。」：
『會稽の海の外に東鯤人有。分ちて二十餘國を為し、歲時をもつて來たりて獻見すと云ふ。』

✓ 後漢書

- 東夷列伝に ①「建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、倭國之極南界也。光武賜以印綬。」：
『建武中元二年、倭奴國、貢を奉じて朝賀す、使人自ら大夫と稱す、倭國の極南の界なり、光武、印綬を以て賜う。』
「安帝永初元年、倭國王帥升等獻生口百六十人、願請見」：
『安帝の永初元年、倭國王帥升等が生口 160 人を獻じ、謁見を請うた。』と記述がある。
- 東夷列伝の中で、②「會稽海外有東鯤人、分為二十餘國。又有夷洲及澶洲。傳言秦始皇遣方士徐福將童男女數千人入海、求蓬萊神仙不得、徐福畏誅不敢還、遂止此洲、世世相承、有數萬家。人民時至會稽市。會稽東冶縣人有入海行遭風、流移至澶洲者。所在絕遠、不可往來」：
『會稽の海外に東鯤人がいる。分かれて 20 余國。又、夷洲と澶洲がある。伝説では、秦の始皇帝が方士の徐福を送り男女数千人を連れ海に入り、蓬萊の神山を求めたが得られず、徐福は、誅殺されることを恐れ敢えて戻らず、その島に止まった。代々受け継がれ、数万家となった。その人民が時を決めて会稽に商売に来る。会稽の東冶縣の人が海に行き風に遭遇し、澶洲に流れ着くものがある。その所は絶遠にして、往来は不可である。』

なお、後漢書の成立は、陳寿の三国志よりも約 150 年後で、「會稽海外有東鯤人」の項は、陳寿の吳志を参考に記載されたとみられる。

漢書・後漢書中の①は、中国の王朝に朝献する倭国・倭人で、②は、長江河口の「會稽」に交易のために来る東鯤人で、伝説の徐福の子孫であることから、同じ倭人と云える。二系統の倭人/倭国が明瞭に分けられず、相互の関係を示す記述もなく漢書・後漢書に記載されている。

三国志に於いても、魏志にある「卑弥呼の邪馬台国」は①に該当し、吳志にある亶州の人々は②に該当する。尚、三国志・吳志の中では、倭人の住む処を明確に亶州としており、漢書・後漢書にある「東鯤人」とはしていない。

二つの倭人の国の不明瞭な存在は、激しくぶつかり合う呉と魏の外交戦略の中では問題で、許容し難いことだったのではないだろうか。

4. 呉と魏の外交戦略

三国志の終盤に至り、西暦 229 年に呉の孫権は、初代の皇帝の座に就いた。就任直後から、周辺国への外交工作を行い、魏との外交戦略のぶつかり合いが始まった。主な対象国は、公孫氏、高句麗と倭国。

4-1 外交戦略の対象となった国々と戸数の表

外交戦略の対象となった公孫氏、高句麗と倭国の位置関係は次の地図の通りで、人口数の概略を知る参考にする戸数の数値を示す。漢書地理志・後漢書地理志・魏志東夷伝など時期がズレているため、不正確ではあるが、概念は掴める数値で、人口＝戸数×5 人で算出すると近い数値となる。倭の人口が、相対的に大きいように見えるが、これは、水田稲作と畑作の差に依存すると推測する。現在でも顕著に見られるが、水田稲作を主とする国と小麦・アワ・ヒエなどの畑作の国を比較すると人口密度の大きな差が見られる。倭国はこの時期までにいち早く水田稲作に成功し、人口が急激に増加していた。一方、韓半島から高句麗と扶余では寒冷な気候と土地柄から水田稲作は行えず、畑作を行っていた。水田稲作と畑作の人口収容力に差があるため、この表の人口の数字の差は、現実的なものであったと考える。人口・戸数で見ると、倭国は相対的には大きな国となる。

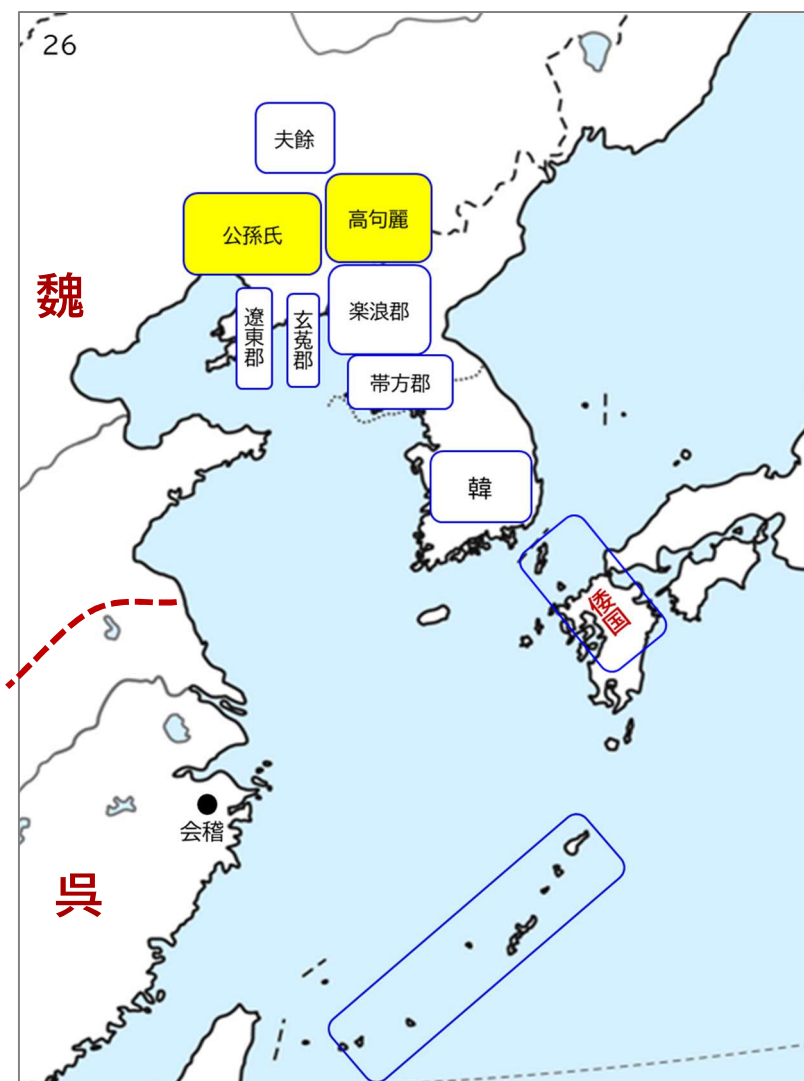


図1 東夷の国々の位置関係を示す地図

		戸数	合計
	扶余		30,000
	高句麗		30,000
	遼東郡		55,972
	玄菟郡		45,006
	樂浪郡		62,812
	帶方郡		4,900
	韓		100,000
倭	對海国	1,000	100,000
	一大国	3,000	
	末盧国	4,000	
	伊都国	1,000	
	奴国	20,000	
	不彌国	1,000	
	邪馬台国	70,000	
倭	投馬国		50,000

図2 東夷の国々の戸数の表

4-2 呉と魏の外交戦争

卑弥呼の魏への朝献使節訪問の時期は、呉と魏の外交戦争の最中となる。

年表で示すと次のようになる。

西暦		魏	呉
230			夷洲・亶洲(倭国)へ使者を派遣。
231			
232			3月、遼東に軍を出し、魏に討たれた。 10月、公孫氏に使者を送る。 公孫氏、馬など呉に献上。呉の爵位を受領。
233		魏は公孫氏に圧力。 呉使者の首/公孫淵を大司馬に	再度使者を送るが、公孫氏が呉を裏切る。 呉の使者の一部が高句麗に逃れ、 高句麗が呉に送り届ける。
234		諸葛亮が陣中に死す。	高句麗へ使者送る。 魏の圧力あり失敗。馬80頭を得て帰国。
235			
236			高句麗王の位宮が呉の使者の首を 幽州に届ける、魏志
237	景初元年	毋丘儉、遼東へ進軍 密かに軍船を送り帯方/楽浪占拠 公孫淵が自立して燕王を称する。	
238	景初2年 正月	司馬懿仲達-遼東に向け出陣	公孫氏が支援を求める
	6月	卑弥呼の使者 帯方郡に到着	
	8月	司馬懿仲達、公孫氏を滅亡	
	12月	倭の使者、魏明帝に面会 金印などを受領	
239	景初3年 1月	明帝死去	
	3月	呉は遼東に軍を送り、魏の守将を撃つ	
240	正始元年	魏の使者: 梯儁が邪馬台国訪問	
241	正始2年		
242	正始3年		
243	正始4年	倭王、魏へ使節を送る 正始4年/6年/8年	
244	正始5年	魏は將軍毋丘儉を高句麗に派遣。首都の丸都城陥落、1,000人斬首。後、首都返還	
245	正始6年	毋丘儉、再度高句麗攻撃。高句麗王逃亡。	
246	正始7年	帯方郡/弓遵・楽浪郡/劉 茂は、反乱した韓を滅亡。弓遵戦死。	
247	正始8年	帯方郡王頡、張政を倭国へ派遣	
248	正始9年	卑弥呼死亡	
249	正始10年		

図 3 三国時代 呉と魏の外交戦争の年表

三国志の魏志と呉志から外交交渉の代表的な事実を列挙すると以下の通りとなる。

- ・ 西暦230年に、呉の皇帝孫権は將軍の衛温・諸葛直に兵1万を与え、夷洲と亶洲の探索を行わせた。亶洲が倭国であったと言われる。両將軍は亶洲への到達に失敗し、偽りの報告をしたが、翌年には発覚して誅殺された。
- ・ 西暦232年10月に、呉の孫権は公孫氏に使者を送り、公孫氏は呉の爵位を受領。成功したとも見えるが、直ちに魏が公孫氏に圧力をかけ、西暦233年に呉が再び使節を公孫氏に送るが、公孫氏は呉を裏切って使者の首を魏に献上した。その時に、逃げた使者の一部が高句麗に到達。高句麗は、逃れた使者を呉に送り届け、外交関係を樹立した。
- ・ 西暦234年、呉は高句麗へ使節を派遣したが、魏の圧力が高句麗側にかかり、失敗した。
- ・ 同年、蜀の諸葛亮孔明が魏との戦場で死亡。この後は、実質的に魏と呉の二極対立となる。
- ・ 西暦236年、高句麗王が呉の使者の首を幽州(魏)に届ける。

以上のような外交戦略の応酬の最中に、魏の公孫氏撲滅の作戦が進行する。

- ・ 西暦237年(景初元年)魏軍は遼東へ侵出。公孫淵は魏の出頭命令を拒んで自立し、燕王を名乗る。景初年間に、魏は密かに軍船を送り楽浪郡と帯方郡を占拠・掌握。
- ・ 西暦238年(景初2年)魏は、公孫氏撲滅のため、司馬懿仲達を出陣させ、籠城した公孫氏を6月には完全に包囲した。公孫氏は8月に滅亡。

この公孫氏撲滅作戦の最中に、倭国は朝献の使節を送り届けた。(景初2年6月)

- ・ 西暦244年には、魏は軍を高句麗に派遣し、その王城を陥落させ、千人斬首を行う。

呉の孫権が外交戦略上、使節を送った処には、倭国、公孫氏と高句麗がある。公孫氏と高句麗は一時的に呉と友好関係を持ったが、魏はそれを許さず、結局は、大軍を送り撲滅を謀った。魏は外交に関しては、誠に厳しい戦略を持ち、実施してきたと云える。

5. 倭国に関する魏の外交戦略

このような状況の最中に、女王卑弥呼は魏に朝献の使節を送った。この朝献は、公孫氏を滅ぼす絶好の時期に実現した。倭国からの贈り物は控えめだったが、魏の明帝からの返礼は、最上級の称号である「親魏倭王」と金印紫綬に加えて、紺地句文の錦3匹、細班華の罽5枚、白絹50匹、金8両、5尺の刀2振り、銅鏡100枚、真珠と鉛丹をそれぞれ50斤など、豪華な品々だった。

この豪華さは、単なる返礼を超えた政略的な意図を感じさせる。その目的は、外交的な宣伝にあったと考えられる。宣伝の対象は、自国民だけでなく、敵対する呉にも向けられていたと推測される。呉は、7～8年前に倭国との外交関係を築こうとして2人の將軍と1万の兵を船で送り出し、惨めな失敗を経験し、將軍2人が処罰されていた。倭国自身が魏に朝献してきた事実は、この外交上の失敗の過去を持つ呉に対し、自国の外交的失敗を想起させ、戦意を挫くことにつながる。これは、魏にとって宣伝に値するものだった。同時に、魏が倭国へ使節を派遣することは、さらなる外交効果を生むことも期待された。

「魏の疑念と確認方法」 しかし、魏の外交戦略は、果たして、外交的宣伝との解釈だけで良かったのだろうか？ 公孫氏の二股外交に苦い思いをしてきた魏は、公孫氏の撲滅を決断した。高句麗に関しても、呉との

友好関係を結び二股外交を行った経緯があり、最終的には大軍を送り込んで徹底的に討伐している。では、倭国の場合はどうだろうか？

倭人は、漢の時代から会稽に来航し、三国時代にも会稽に来航していた。中国の史書では、倭人は、徐福を祖先とすることから、呉の会稽に来航する人も、卑弥呼の邪馬台国と同じ倭人となる。魏の外交を司る人々が、倭国の二股外交を疑わなかったとは考えられない。もし二股外交を行っていた場合、倭国への特別待遇や豪華な贈り物は、その宣伝効果が逆になってしまう。魏側には、二股外交ではないことを確認する必要があったが、果たして、確認する方法はあったのだろうか？

倭国の使節である難升米らに確認しても、分かりきった答えしか返ってこないはずで、確認にはならない。最も有効な確認方法は、魏自体が倭国へ使節を派遣し、直接、現地で「二股外交がないこと」を確認することだったと推測される。そこで明帝は、豪華な贈り物を与える際、主目的となる金印紫綬は、魏の使節が訪問して、直接、女王卑弥呼に授けることを宣言した。これにより、倭国側に拒否する機会や理由を与えることなく、魏の使節訪問を既成事実とした。こうして、中国の外交使節が倭国を訪問するという異例の外交が実現した。なお、外交儀礼上は、魏と倭国の親善使節として派遣された。

6. 魏の倭国訪問使節

倭国訪問の指示を出した魏の明帝は、その直後の景初2年12月8日に健康を害し、景初3年正月に死去した。その翌年の正始元年、帯方郡の梯儁(ていしゅん)が親魏倭王の金印と紫綬を持って倭国を訪問した。梯儁は倭国に関する的確な調査を行い、親善外交という目的を果たして帰還した。

その結果として作成された報告書、すなわち梯儁一行による報告書が、『魏志倭人伝』の中核として現代に残っており、私たちもその内容を知ることができる。それは、簡潔かつ明快な文章で綴られた名文である。

倭と魏との外交関係はその後にも継続し、倭国側は狗奴国との問題を抱えて魏に援助を求め、魏は張政(ちょうせい)を派遣するなど、良好な関係が続いた。公孫氏や高句麗のように、魏から討伐軍を送り込まれるような事態は発生しておらず、倭国が二股外交を行っていると見なされなかったと推測される。

梯儁らは、呉と交易関係がある倭人の国が、現在の沖縄であることを把握し、邪馬台国の支配下にはないことを確認し、二股外交は無かった判断したと考えられる。そして、その国名が投馬国であることと、その所在地が邪馬台国から水行で南へ20日の遠方であることも聴取し、これらの情報を別途、報告書として提出したと推定される。

7. 投馬国の追記に関する考察

陳寿は、呉志に呉と交易する倭人の国を記している。また、魏と呉の厳しい外交上の対立についても記述しており、当然、魏の外交戦略を理解していたと考えられる。魏の明帝が、倭人が魏と友好関係を持ち、その一方で呉と継続して交易関係を持っているという状況を問題視して、使節団を派遣し二股外交の問題の解決を図っていた。陳寿はその意図を察知していたはずだ。

魏が外交戦略上で懸念していた二股外交の問題は、倭国へ直接送り込んだ使節団の調査で解消した。陳寿は『魏志倭人伝』を記述するに当たって、この重要な問題を記載しておくべきと考え、投馬国の情報を入れる箇所を探し、邪馬台国への道のりの中に追記したものと考えられる。

本来は、誤解を生まないよう慎重に文章を作成すべきところだが、簡潔さを旨とする陳寿は、報告書に記載されていた投馬国の位置情報をそのまま挿入したのであろう。日本人の側からすれば正確な記述を望むところだが、著者である陳寿も『三国志』の読者も中国本土の人々であり、辺鄙な島国である倭国の詳細な地理については、配慮をしなくとも、問題ないと判断したのかもしれない。

8. 終わりに

「その2」では、魏志倭人伝の旅程に、投馬国の文章を強引に挿入した理由を探った。

魏志倭人伝は、三国志という膨大な文献の中のごく一部にしか過ぎない。その膨大な文献の中に、問題となる「理由」が有るとすると、探る範囲が格段と広くなる。魏・蜀・呉の三国のお互いに戦い合う状況があり、中国統一を計る三国の戦略がうごめく状態が存在した。その状況の際中に、卑弥呼の邪馬台国が魏に朝献使節を送り込んだ。魏の対応は、単純に魏と邪馬台国の関係だけで判断されたのではなく、魏・蜀・呉の三国の政治・外交が関わっていた。従って、「理由」を探る範囲は、呉志の記述にも及ぶ必要があった。

また、投馬国の記述の挿入の仕方に関しては、矛盾が生じる、不用意で強引な挿入方法だったが、それは、宋の文帝が、「簡潔すぎる」と称した陳寿の記述の仕方の悪い面が出てしまったものとする。

3部構成の残りの部分は、次のように予定している。

その3: 「邪馬台国の所在地」では、今回の「史料批判」で定まった「旅程」に基づき、所在地を搜索する。

ポイントとなるのは、九州上陸地点。従来の唐津上陸論は、「旅程」とは距離が異なることなどから採用せず、別の上陸地点を採用する。「旅程」に方向・距離が正確に書かれて居れば、議論も無く辿れそうだが、地理状況が現代と古代では違うことがあり、考慮すべき事が存在した。

以上